飯能戦争異聞

表題の「**飯能戦争異聞**」は、このホームページの管理人（山口正義）が付けた名称です。
以下の本文は、『折々の言の葉』（山口満著、まつやま書房、平成二十三年）の中の一節「三十三・曾祖母の語った事績　六、飯能戦争の事」を、ほぼそのまま載せるものです。
著者・山口満（故人）は管理人の実兄で、管理人は『折々の言の葉』を編集した経緯があります。
この「曾祖母の語った事績　飯能戦争の事」の中に出て来る「能仁寺山門前の一騎打ち」等は、飯能戦争に関する資料の中で語られたことがないように思われますので、どこまでが史実かは別として、飯能戦争の一面を物語るものとして貴重と考え、このホームページに掲載します。
この内容は、平成二十一年十月に山口満が毛呂山町の資料館まつりで講演した内容をもとに、同人が毛呂山町老人クラブ連合寿会の「ことぶき」に寄稿したものです。

なお、次の関連資料があり貴重です。
「振武軍の勇士・杉山銀之丞～もう一人の渋沢平九郎～」
（内野勝裕著、『埼玉史談』第57巻第2号、平成二十二年七月）

曾祖母の語った事績　飯能戦争の事

山口　満

（平成二十一年十二月）

（その一）

今年も、総合公園の晩秋風情が増すなかで、町の「産業まつり」が実施された。前日は、朝からの降雨で、景気づけの花火の打ち上げもない淋しい一日であったが、翌日は好天となって暖かい晩秋の一日となり、大変な賑いのようであった。
その折のこと、筆者は全く見知らぬ数名の方から、先日（十月三十一日）資料館まつりの行事のひとつである、講演会をお聴きになられた方から、大変興味深く面白かった旨をお聞きしましたので、内容をぜひ「ことぶき」に投稿してほしいとのことであった。
筆者は、一瞬戸惑いを感じたが、否応なくお引受けすることに相成ってしまった。もっとも、講題に関しては「曽祖母の語った事績」のひとつとして、投稿するつもりでいたので、渡りに舟の感でもあったが。
資料館まつりの講演会は前回同様、筆者の受け持ち行事となってしまったが、当日はあまり聞き馴れぬ講題とあってか、会場の同館学習室は満席で何人か立席の方も居られ、筆者にはありがたく深謝申し上げます。その聞き慣れぬ講題とは「曾祖母が語った飯能戦争～維新前後の毛呂山～」である。

持ち時間の一時間半は、あっという間の出来事で、終了後、お聞きになられた方達から「百四十年前という、あまり遠くない昔、飯能という身近か過ぎる地域での出来事なので、戦争の恐怖を肌で感じるようでした」（六十代女性）、「こんな片田舎で、日本の近代化の幕明けとなった戦争が行われたのか」（七十代男性）、といった言の葉を頂戴した。そう言えば、筆者は、休憩時間も忘れて話したこともあってか、雑言などもなく、熱心にお聞き賜り、帰宅してからも筆者の目尻は下りっぱなしであったようだ。

曽祖母の語った飯能戦争事績は、曽祖母が十二才の時であったから、概ね記憶に残っていたと思われるが、その語り口調は、比較的単調で、かつ断片的な事績であったようだ。

従って、飯能戦争の起因、社会的・政治的背景、経過、大義名分、といったようなことは語られていないので、本戦争の御理解の一助として、筆者の拙い推考を述べることにする。当を得ているか心細いことではあるが。

飯能戦争は、明治維新の幕明けとなった「戊辰戦争」の煽りを受けた地域の小規模な戦争であった。戊辰戦争とは、慶応四年（改元・明治元年・一八六八）一月の「鳥羽・伏見の戦い」から、翌年五月の箱館戦争までの、新政府軍対旧幕諸藩及び旧幕臣の抵抗勢力との戦争であった。

この年、四月一日薩摩藩邸において、史上有名な、西郷隆盛と勝海舟による「江戸談判」で「無血開城」と決まり、戦いが終息するかに見えたが、しかし、徳川恩顧の一部幕臣は、あらたな抵抗勢力「彰義隊」を結成し、隊長（頭取）渋沢成一郎、副隊長天野八郎らを盟主として、上野山に立て篭もり一戦を交えたが敗北。幕府はすでに恭順の意を表し、最後の将軍徳川慶喜は寛永寺に蟄居しており、もはや旧幕臣を統率することはできなかった。

彰義隊は、旧一橋田安家の関係者が中心であり、江戸開城までは、江戸市中見回り、徳川慶喜護衛等の任務に当っていたが、新政府軍との対立は解けていなかった。

更に、彰義隊内部にも確執があり、隊長渋沢成一郎とこれに同意する隊士は、上野山を下り、田無村に撤退した。そこで新たに隊長渋沢成一郎、副隊長尾高惇忠、参謀渋沢平九郎等によって「振武軍」を結成した。

江戸の情勢をさぐっていた振武軍は、田無村に地の利がないとして箱根ヶ崎へ撤退したが、そこで五月十五日の新政府軍の上野山総攻撃と彰義隊の壊滅を知り、飯能に移駐した。箱根ヶ崎は、日光街道と青梅街道の交わる交通の要所で、飯能から八王子方面に至るには、必ず通過する宿場町であった。

この宿場に、五月十二日から三日間滞在していた振武軍は、近隣村々から軍資金、食料、人夫等を調達して、五月十八日飯能に現われた。飯能に移駐した理由は、この地は、かつて旧一橋田安家の旧領であったこと、更に、背後に秩父山岳が連なり「背水の陣」を敷くのに屈強の地であったものと筆者は推考するものである。

飯能に移駐した振武軍と村役人及び寺院との駆引きの結果、市内六ヶ所の寺院に分宿することになり、本陣を能仁寺とし本隊百五十名を、観音寺五十名、広渡寺四十名、智観寺百名、心応寺五十名、玉宝寺五十名等、いずれも現在の市街地の寺院に分宿駐屯することになった。

（その二）

これらの抵抗勢力の兵力は、資料によって多少異なるものの、およそ六百人程度のものであったようである。

（平成二十二年一月）

本陣と定めた能仁寺は、背後に羅漢山（天覧山）を背負い、市街地及び平地部を一望できる自然の要塞を成しており、指揮下に入った他の寺院は指呼の間にあった。

五月二十二日夕刻、入間川の笹井河原に出していた両軍の「物見」（斥候）が偶然衝突して戦闘の火ぶたが切られ、未明に至り新政府軍の進攻が開始された。その新政府軍の陣立てを探ると、次のようなものであったとされる。

新政府軍参謀大村益次郎は、軍監（新政府軍目付け役・監督）の福岡藩士尾江四郎左衛門に命じ、同月十五日に川越城に入った。振武軍鎮圧が、その目的であったが、「御総督の御指揮を以趨令任」つまり、御総督府の指令に従う意向の意思表示であったから、すでに恭順していた川越藩松平周防守の藩兵も、尾江四郎左衛門の指揮下に入ったということであろう。

時置かず、同月十七日川越城の軍監のもとへ、「武州入間郡扇町屋（入間市）と申所へ脱走の兵共四～五百人ほど罷越」という物見の兵からの情報がもたらされた。

敏速な軍監の指揮で五十人の筑前兵、二百人余の川越藩兵は坂戸村へ向かい、別動隊として、同川越藩兵二百人余が入間川に向って進撃を開始して、双方から挟撃する作戦計画であったとされる。

しかし、振武軍は当初奥多摩山岳地帯を背後にした、青梅周辺の寺院に立て籠る作戦計画であったといわれる。

だが、振武軍は青梅を目前にして、突如飯能に籠るべく、方向転換をしてしまった。

振武軍が突如作戦変更をしてしまった事由に関しては、全く資料などもなく不詳だが、旧主（一橋田安家）の旧領地という「心安さ」が振武軍幹部、特に隊長の渋沢成一郎の心底に去来したことによるものではないかと、筆者は推考するものである。

このような情勢下にもかかわらず、新政府軍には追々芸州、備前等の藩兵も加わり、更に北武忍藩も百三十人余り加勢出陣した。

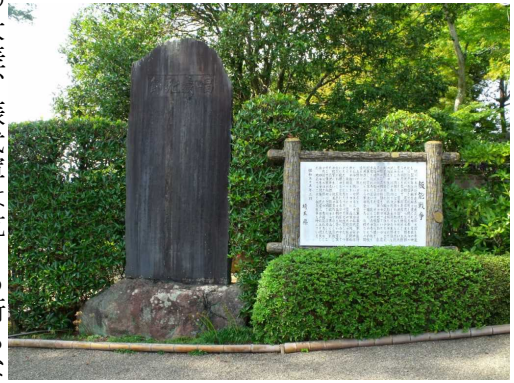
こうして、三千人ともいわれる新政府軍が、名栗、白子、鹿山、扇町屋と、それぞれ市街地を囲んで要路から飯能へ進攻する手筈を整えた。

八王子口の直竹（名栗）からは筑前藩兵、秩父口は川越藩兵、鹿山口は備前、忍、川越、延岡等の諸藩兵及び、新政府軍の主力部隊、薩摩、長州藩兵は、野田から双柳へと軍を進め、笹井河原での両軍物見の遭遇戦があってから、二十三日払暁、新政府軍に振武軍総攻撃作戦の命が下された。

二十二日夕刻から笹井河原での遭遇戦、つまり、戦闘の初戦は、情勢が振武軍に有利に推移したようで、一旦停戦状態となったことから、新政府軍幹部は戸惑を感じ、翌払暁の総攻撃を命じたものといわれる。

しかしながら、近代兵器（重火器）、兵力に圧倒的な優位を持つ新政府軍に、若干の火器に従来からの戦闘方式、加うるに兵力の大差、振武軍は抗うる術もないまま苦戦を強いられ、正午近くには、本陣の能仁寺に着弾、炎上し、ついに振武軍隊士は、それぞれ奥

能仁寺


能仁寺にある飯能戦争の碑

武蔵の山中深く敗走してしまった。　飯能戦争を報じた、当時の地方紙「此花新書」によると「此戦争夜半より夜明けまで一度、また翌早朝より四ツ過ぎごろまで一度、二十二日夜より二十三日午前と、両度の戦争なりという」と報じている。

更に、ごく最近経眼した資料によれば（資料銘、所有者名は非公開の約束）「二十三日夕刻に至り、夜陰を待たず敗残の輩、背後の山中深く遁走せり」、そして、「しかれども、官軍これを追い討ちすることなし」最後に飯能戦争を「武州一日戦争」とも書き残している。新らしい飯能戦争の別呼称名が確認されるに至った。

何となく得心できる別呼称名ではないかと筆者は思うものであるし、後世に残したい別名称であろう。

以上、飯能戦争の舞台となった、能仁寺の記録資料及び、飯能市立郷土館資料、加わうるに新資料発見等を参考にして、更に筆者の拙い若干の推考を加味して、稿題である飯能戦争の概要の記述を試みた訳である。

（その三）　　（平成二十二年二月）

次に、稿題の示す曽祖母が語った事績「飯能戦争余聞」（一部事績は祖父からの経耳）の記憶を、前述の戦闘経緯を踏まえて、筆者なりの考察を深めることにしたい。

五月二十二日夕刻、双方の「物見」（斥候）の兵が入間河原で遭遇、戦闘の火蓋が切られたが、夜に入りこの前哨戦は振武軍有利に展開したが、中断してしまったといわれる。

銃、兵力に圧倒的な大差のある振武軍に、どうして有利に動いたのか。その起因は、振武軍が組織した、我が国古来からの戦闘方式である「抜刀隊」にあったといわれる。

つまり、抜刀隊とは、夜陰にまぎれて「白刃」をもって斬り込む「夜襲戦」である。この戦闘方式は効果が高いとされる。使用する武器の日本刀の柄には、「目印」とする白布を巻きつけるのが通常であったといわれる。

いつも、余談で申し訳ないが、この伝統的な「斬り込み夜襲戦」は、かの太平洋戦争においてもその効果は極めて高かった。

つまり、当時の米軍は、日本軍の銃、火器による戦闘方式よりも、この白刃による「斬り込み夜襲作戦」が最大の恐怖であったといわれていることからも、肯定される。

抜刀隊の力戦によって、いっ時、有利に動いた戦況も、未明からの新政府軍総攻撃によって、わずか一日で奥武蔵山中に敗走した。

振武軍の組織した抜刀隊は、一番隊から六番隊（隊士二十五名前後）に編制されていた。一・二・六番隊は本陣詰め、三・四・五番隊は実戦配置、戦闘に備えたと伝える。

彼等の立て籠もった飯能地方は、旧・一橋田安家領であり、その範囲は旧多摩、青梅、高麗、入間（一部）に及ぶ、往古から尚武の気風がただよい、就中、明治維新の頃には、身分をこえて「剣の道」を極める若者が多かった。

多摩日野宿「天然理心流」（新撰組　近藤勇隊長、土方歳三副長等が学ぶ）、多摩成木村（小野派一刀流）、同青梅村、高麗宿（甲源一刀流）、吾野宿（北辰一刀流）、浅羽（小野派一刀流）などであった。（祖父の話）

再度余談で恐縮であるが、甲源一刀流といえば、古今最長編小説、中里介山の「大菩薩峠」を思い

起す方も居られよう。主人公の机龍之介は、甲源一刀流の名手で、その秘剣とされる「音無しの構え」は架空のものではなく、実在の同流派の秘剣であったと、ずっと以前に経眼した記憶がある。

元もと、この流派は、中世末期甲州浪人逸見若狭守が秩父両神に居住、秩父、多摩地域に広めた「地方（じかた）流派の剣」とされている。（祖父の話）これらの、流派を学んだ地域の門弟達を徴発動員して、振武軍は兵力増進を意図した。

曽祖母の語りによると、筆者の地域からも次の人々が徴発動員されている。葛貫地区　宿谷数馬（小野派一刀流・甲源一刀流）宿谷地区　市川龍太郎（北辰一刀流）大谷木地区　大谷木季利（医師・救護）　高麗宿　杉山銀之丞（甲源一刀流・比留間道場師範代）

振武軍に動員された当地区の宿谷数馬、市川龍太郎は、六番隊士として、本陣詰となったが、予想に反しあっけない幕切れとなって実戦に及ばぬまに故地に帰った。高麗宿比留間道場から動員された杉山銀之丞は、師範代という剣の使い手であったことから三番隊副隊長を命ぜられ、前夜入間河原で戦い、翌日は本陣指揮下に入った。

彼は、敗戦濃くなった正午近く、一計を按じた。それは、能仁寺山門を人ひとりが、やっと通れるだけ開扉して、その裏側にひそみ進攻してくる新政府軍兵士三名を、連続斬り倒してしまった。

思わぬ事態に、新政府軍隊長は、自軍の中で随一の「使い手」と彼の杉山銀之丞との一騎打ちに持ち込んだ。一騎打ちでは「五合の太刀筋」で杉山銀之丞は右肩から斬り倒されたといわれるが、相手も左手首に手傷を負ったそうだ。五合の太刀筋とは、五度の刃合わせである。つまり、五回目の斬り合いで、右肩に相手の日本刀を受けたということである。この一騎打ちが、飯能戦争における最高場面「能仁寺山門前の修羅場」といって曽祖母から語り伝えられたものである。

わずか一日で敗走した振武軍に対する「落人詮議」は、小さな抵抗勢力の内乱であり、詮議は比較的ゆるやかであった。それでも、敗走隊士を土蔵に匿った農家（市川氏、小山氏）の二戸が権現堂地区に実在している。二ヶ月ほどで、詮議が薄れ、立去る折に、御礼の意味か市川氏には、差料（短刀）一口、銘、盛光（現存）を贈っている。この盛光は大変出来が上々で、先年ある刀剣展に出展し、筆者も経眼している。小山氏には、後日落人から徳川家家紋入りの茶器を贈られたそうである。

（その四）　　（平成二十二年三月）

曽祖母の語った飯能戦争事績の経耳は、何せ六十数年前の記憶であり、かつ断片的な語り口調であったことによるもので、本稿の推移は、必ずしも適正ではないと思われるが、御理解を賜りたきことである。

曽祖母が語った本事件事績をもう少々…

筆者の地域から、徴発動員された大谷木季利医師は、戦闘中に振武軍負傷者の救護にあたったが、本事件終結後は、新政府軍が、接収した、鹿山宿の或る旅寵（はたご・旅館）で、指示に従い、双方の負傷者（十六名）の治療にあたったそうであるが、その任期は約半年間に及んだといわれている。

本事件から三年後、大谷木医師は、このことの功績が認められ、明治新政府から「金二両」が下賜されたそうである。

思わぬ下賜金を手中にした大谷木医師は、先年鹿山宿での治療介護体験から、この下賜金を利用し、冬期前面の大谷木川に「製氷場」を設置採氷して、自宅裏の小さな「氷蔵」（こおりぐら）に貯蔵、夏期の患者に無料で提供したといわれ、大谷木医師に対する、地域住民の信頼は厚かったと、曽祖母

が語っていた記憶がある。

次に、飯能戦争の主人公的な存在となってしまった杉山銀之丞の出自に関して、曽祖母は意外な事績を語ってくれた。

彼は、高麗宿近隣の旧平沢村の旧家横手氏一族の出生であるといわれる。子供の頃から「剣の道」を好み、十六才で名声の高かった高麗宿比留間道場（甲源一刀流）に入門したが、上達が早く、五年後には比留間道場師範代（道場主の代稽古）を勤めるまでの腕前となった。当時、高麗宿、日野宿（都下）周辺では、彼と互角に「立ち合う」ことのできる若者は、ほとんど見当らなかったそうだ。

更に、彼は、剣の修行のかたわら、学問を高麗神社宮司家に学んだそうだ。つまり、世にいう「文武」にすぐれた人物であったということであろうか。

時経て、そんな彼を待ち受けていたことは、一橋田安家旧領（高麗、飯能、青梅、八王子、日野の各宿等）からの振武軍隊士としての徴発動員要請であった。

比留間道場からは、彼の外に門弟の中から「腕の立つ」三名が振武軍徴発動員に応じたそうだが、彼は応募に先立ち、古来から高麗宿一の名門と名高い「杉山氏」の養子に入り、旧姓「横手銀十郎」改め「杉山銀之丞」と名乗り、振武軍隊士に応募したそうだ。

名前の一字「丞」は養子家杉山氏世襲名の一字であって、これを拝領用いたものであろうか。つまり、高麗宿一の名門杉山氏の身内であるという、証であろう。かれの「諱」（いみな、本名）に関しては、まったく詳かでないが、「吉永」「義永」（よしなが）と曽祖母は語っていたような記憶があるが、正確な諱は定かでないようだ。

比留間道場から徴発動員に応じた門弟三名のその後に関する事績は、残念ながら曽祖母は語ることはなかったと記憶している。

杉山銀之丞の出自、及び飯能戦争の経緯を、曽祖母はこの様に語っているが、これらの事績を踏まえて、筆者の推考を深めたい。

後世、振武軍随一の「剣の名手」と伝えられるようになった杉山銀之丞と、一騎打ちの勝負に賭けた、新政府軍剣士とは、どのような人物であったか、まったく謎に包まれていて後世に伝えられていないのである。

飯能戦争の圧巻とされる、この「果し合い」を曽祖母は相手方を「官軍無双の凄腕（すごうで）の使い手」と語るのみである。

だが、筆者は曽祖母の語る「凄腕の使い手」に何か隠されているようで気になる。確認となる資料等は見当たらないし、筆者の拙い推測の域内のことの思惑であるが。

並み居る、明治政府高官で「凄腕の使い手」といえば、維新の動乱で抜群の活躍をした鹿児島藩士「薩摩示現流」無双の達人で、後に熊本鎮台司令長官となった陸軍少将桐野利秋ではなかったか。これを裏付けるかのように、かれの若年の姓名は「中村半次郎」で、人呼んで「人斬りの半次郎」の異名を持ち幾多の実戦体験者であることから、筆者は何となく、得心できるようでならない。

杉山銀之丞の肖像画（岩沢琢堂画、新毛呂山町史より）

敗走隊士を土蔵に匿った感謝の心から贈ったとされる短刀は、中心（なかご）に「盛光」と刀匠銘があった。約六百年前の備前長船盛光の作で、通常「二字銘盛光」といわれ極めて出来の優れた、世上に名高い刀匠の短刀である。従って、このような名刀を所持できた隊士は、よほど大身で千石以上の旗本であろう。一方の小山氏の場合も同様であったと、筆者は推察するものである。

以上、曽祖母の語った飯能戦争の大まかであるが、それにしても、身近な地域の歴史は星霜の中で「まぼろしの伝承」となってしまうのであろうか。

如月二十四日　誌

（平成二十二年四月）

（その五）

曽祖母の語った事績、飯能戦争に関して、前号で拙稿のまま、結稿するつもりであったが、脱稿後の曽祖母からの思い起した事績、拙稿を経眼なされた方々からの御質問、本戦争の新たな情報等を、更には、筆者の拙い思惑を踏まえて「曽祖母の語った飯能戦争」を結稿することにしたい。

前述のように、本戦争で俄（にわ）かに、抵抗勢力振武軍の主人公的な役割を担うことになった杉山銀之丞の最期の事績に関して、やっと、曽祖母が語った記憶がよみがえった。敗色濃くなった昼近く、官軍「凄腕の使い手」と杉山銀之丞との「果し合い」では、両者の剣は伯仲した互角の技量であったが、前述のように「五合の太刀筋」で右肩から斬り倒され数刻で息を引きとったそうである。

つまり、即死に近い状態で斬り倒されたそうである。通常的な「果し合い」であれば、斬り倒すまでに至らないとされるが、しからば、彼の受けた太刀筋は、いかなる流派のものであろうか。やはり「薩摩示現流」ではなかったかと、筆者は推測するものである。

つまり、小手先の技を用いず、全身で相手にぶつかり斬り倒す、示現流極意とされる「捨て身の剣」ではないかということである。

従って、彼の相手は、前述のように確証のないままの思惑で恐縮であるが「人斬り半次郎」こと「桐野利秋」ではなかったか。仮に異なったとしても、旧鹿児島藩士中の示現流名手が相手であった可能性が高いのではないかと筆者は推考するものである。

因みに、筆者が彼の相手と推考する桐野利秋は、本戦争から十年後の明治十年（一八七七年）我が国最後の内乱である「西南の役」（戦争）で西郷隆盛と旧鹿児島藩士達の「抜刀隊」の隊長として、かつての部下、今は熊本鎮台司令長官「谷千城」（たにたてき）率いる官軍と史上名高き「田原坂」の激闘に及んだが、奮戦の末、田原坂の露と消えた。

本旨にもどって、この果し合いは、政府軍隊長の筋書きがあったと、曽祖母は語っていた記憶がある。残念ながら忘れてしまい、何としても思い起すことができない。だが、筆者の思惑を述べるならば、政府軍隊長の筋書は、銃を使用すれば処理は極めて簡単なことであるが、あえて果し合いに持ち込んだことは、彼が「地方（じかた）剣法」であっても甲源一刀流の名手としての人望、何よりも甲源一刀流「太刀筋」の見極め、更には、彼にたいする「武士道」的な「思いやりの心」の意図が隠されていたのではないだろうか。

仮にこのように理解すると「命の遺取り」である悲惨な「修羅場」の出来事として、単純に片付けることのできない何かがあるように筆者は思えてならない。修羅場と化した、果し合いの次第は、直ちに杉山、横手両氏にもたらされ、遺体の引取りを要請されたが、両氏とも、後々の関わりを恐れてか、言を左右にして、非情にもこれを拒否したそうである。

しかしながら、唯一人母親（名前不詳）のみは、母子の情忍びがたく、今は変り果てた我が子の遺

体を泣く泣く引取り、横手氏の菩提寺（寺名不詳）墓地に埋葬したそうだ。

悠久の歴史は、幾星霜を経るも、彼の「反乱隊士」の汚名の重圧は、拭い去ることはないのだろうか。人の世の無常の風は、わびしくも「物の哀れ」を知らされる。

こんな想いが筆者の胸中をよぎるが、先日、彼の新しい情報を史友の内野先生から経耳した。彼の肖像画が高麗宿に実在「筆の者」（画家名）は何と筆者の地域の郷土画家「岩沢琢堂」だそうである。情報のみで原本の確認に至っていないが、杉山銀之丞の新たな人物像が期待される、貴重な資料の発見で、筆者も是非とも経眼したいと願っている。

次に、本稿に関して「一橋田安家」及び「渋沢氏」の御質問を頂戴しましたので、少々。一橋家は徳川将軍家の分家。田安家、清水家とともに徳川御三卿の一つ。八代将軍吉宗の四男宗尹が江戸城一橋門内に居住したことに始まる。石高十万石の采地（領地）は、多摩、入間川流域に広がる肥沃な地であった。振武軍はこのことを踏まえて、飯能地域に拠点を求めたものであろう。なお一橋家からは、十一代、十五代将軍を輩出している。

渋沢氏は、利根川南岸、大里郡血洗島（現深谷市）の豪農の出自で、振武軍隊長渋沢誠一郎、参謀渋沢平九郎（黒山で自刃）は一橋家下級家臣であった。明治の実業界の大御所渋沢栄一は渋沢宗家の出自である。

最後に、川越市大字笠幡字隠ケ谷戸は、飯能戦争落人が定住したことからの地名であるそうだ。以上で曽祖母の語った飯能戦争事績を終稿としたい。何せ半世紀を越える以前の経耳、不備は免れぬこと御理解願うのみである。

（その六）　　（平成二十二年六月）

昨年秋、町資料館まつりの恒例行事の一つとなった講演会を、請われるまま、お引き受けしてしまった講題に関して、筆者は先号をもって終稿としていたが、その後、数名の方々から御質問、お問合せ等を頂戴した。

筆者が、半世紀以上も前、つまり、小学校低学年の頃、曽祖母から経耳した飯能戦争事績が拙稿にもかかわらず、このような事態と相成ったことに、いささか戸惑いを実感している昨今であるが、その反面、資料等は実在するものの、歴史の流れは急速を極め、飯能戦争事績伝承も、やがて忘却の彼方に消え失せることに、若干の歯止めをかけた、いわば本戦争事績再検証の「火付け役」となってしまったことに対する、ある種の思惑が、筆者の胸中を去来したことも事実であった。

筆者の、戸惑い思惑はさて置き、先号をもって一応終稿としたので、本稿は筆者の存念で大変恐縮であるが「補稿」もしくは「あと書き」として稿を深めることにしたい。

数名の方から頂戴した御質問のなかから

飯能戦争に遭遇した、曽祖母は十二才の少女であったようなので、当然のことながら、戦いの現場、つまり、最も悲惨な「修羅場」を目撃していないこと「女の身」でありながら、事態の経緯及び、戦闘用語（例、五合の太刀筋、果し合い）など、当時の情報を克明に、記憶していたことが、少々不可解といった主旨の御質問のようであった。

その頃、曽祖母は「読み書き・そろばん」のほか。女子の特技である「和裁」を習得すべく、毛呂宿の寺子屋「伊藤塾」に泊り込みの生活をしていたが、開戦の三日前頃から毛呂宿に駐屯していた少数の新政府軍の動きが慌ただしくなり、本戦争終息までの約一ヶ月間は生家に帰された。周辺住民は

昼間、仕事以外は外出を自粛、夜間は戸締りを固くし、ひっそりと暮す生活を予義なくされたそうである。御質問の主旨を裏付けるような、曽祖母の語り草ではないだろうか。

しからば、曽祖母はいかにして、飯能戦争の情報を入手したのだろうか。筆者も経耳した子供のころには不可解でならなかった。

しかしながら、後年祖父からの、次のような言の葉から納得することができた。飯能戦争から二十数年後の明治中期、曽祖母の義姪が、かつて杉山銀之丞が生れ育った、旧平沢村（現・日高市大字平沢字久保ヶ谷戸）「鹿川氏」に嫁入りしていること、さらに、甥が、あろうことか、杉山銀之丞の生家「横手氏」一族（生家ではない）に婿入りしていることからの情報源であったようだ。

つまり、親戚、身内等が集う「盆・正月」といった席で、たまたま、飯能戦争が話題に上った折に入手した情報であったものであろう。そして、後年曽祖母が、筆者に「寝話」として、語ってくれたものである。従って、曽祖母の語った飯能戦争事績は、かなり信用性の高い、事績伝承であろうと、筆者は推考肯定することに、いささかも、戸惑うことはない。

次に、筆者が「剣の道」に大変造詣が深いようだが、やはり曽祖母からの経耳であろうかとの御質問を複数の方から頂戴した。

御質問の主旨の粗方は祖父から経耳したものである。祖父は、日露戦役に陸軍騎兵隊（原隊・千葉県習志野騎兵隊第十六連隊）として従軍、実戦体験している。周知のように騎兵隊は、馬上からサーベル（洋式軍刀）を武器に敵陣に斬り込む、集団戦法部隊である。

つまり、祖父のこのような軍隊生活にともなう素因から、剣の道に造詣があったものであろうと筆者は推考するものである。

御質問の次は、稿中の剣の道用語の解説を御願いしたいとのことであるので少々……

「果し合い」一対一の決闘である。江戸時代仇討ちも、同意語とされていた。

「凄腕の使い手」剣の達人、名人、名手といわれる人達を指す意味があるとされるが、筆者は曽祖母から直接経耳した記憶があるので、当時からよく通常的な言の葉として用いられていたことであろう。

「太刀筋」この言の葉には複数の解釈があるようだ。それぞれの剣の流派が最も得意とする「技」各流派の「決まり手」「隠し技」、人それぞれが習得した流派名等の意味がある。因みに、広辞苑は太刀筋を「太刀の使い方」と定義している。例言すれば「杉山銀之丞の太刀筋（流派）」は「甲源一刀流」その「甲源一刀流の太刀筋（奥義）」は「音無しの構」といった意味合をもつ言の葉である。

これをもって、不備は心得ているが、終稿後の御質問に、筆者の拙いお答を申し上げまして、曽祖母が語った飯能戦争事績を完稿致します。御賢察御理解賜りますれば、望外のことに存じますとともに御笑読下され感謝申し上げます。

水無月　八日　誌

（以上）